

学校経営のポイント

“日・米・中・韓の高校生調査”結果

若井 彌一

日本の高校生は、米・中・韓の高校生と比較して、学業等生活全般にわたり「希望」が少ないのが特徴だという調査結果が報道された（3月2日）。

日本青少年研究所による“調査結果”報道

この調査は、(財)日本青少年研究所(千石保所長)が実施したものである。調査方法の詳細については省略するが(同研究所のHPにアクセスしていただきたい)、高校生対象の、集団質問紙法によるもので、サンプル数は、日本 1342 票、米国 1008 票、中国 3221 票、韓国 1714 票である(調査時期;日・米・中は 2005 年 10 月~12 月、韓は 2005 年 10 月~11 月)。

この調査結果について、報道では「日本の高校生は、意欲足りない 日・米・中・韓で意識調査」という見出しが用いられ、文中の解説でも、「『あれもこれもやりたい』と意欲的な他国に比べ、趣味や友人関係、学業など生活全般にわたって『希望』が少ないことが特徴だ」というように、日本の高校生の生活意欲の乏しさ、将来に対する明るい期待・願望の程度の低さが、やや一面的に強調されている印象を受ける(平成 18 年 3 月 2 日、asahi.com:朝日新聞教育ニュース)。

この報道は、調査した研究所の「調査結果のレジュメ」のうち、「3 現在の希望」についてのまとめの文章(解説)を下敷き(土台)にしていると思われるが、日本の高校生がまったく何事もやる気がないと即断することには慎重でありたい。

いずれにしろ、この調査結果は、現在の日本の子どもの意識を考えるうえで参考とすることのできるデータを提供している。

調査項目数が多いので、結果を総合的にどうまとめるかは一様でなからう。

国家的危機に無自覚で“ほどほどの満足感”

筆者がイメージした日本の高校生像は、最近(といっても、ここ 10 数年)の国家的危機〔調査項目なし〕にさほど精神的影響を受けず、なんとか生きていける、とほどほどの満足感をもって将来展望しているというものである。

「食べていける収入があれば、のんびりと暮らしたい」の肯定率は、確かに報道指摘のとおり、日本が高く 65%、米国・韓国が同率で 52.8%、中国が 32.2%である。

しかし、「将来のために今をがんばって生きたい」の肯定率も高く、中国 96.4%、米国 93.8%、日本 88.7%、韓国 79.2%であり、「人に負けないようがんばりたい」の肯定率も、中国 94.2%、韓国 89.5%、日本 89.0%、米国 44.8%である。

また、「他人のためより、自分のためを考えて行動したい」の肯定率は、米国 85.0%、韓国 68.9%、中国 48.4%、日本 47.5%である。

教育の可能性が乏しいと嘆いたり、教育責任は誰にある、などと大騒ぎするほどの調査結果ではなさそうである。

ただ、満足感と将来への楽観視の表れかもしれないが、「できるだけいい大学に入るようがんばりたい」の肯定率 61.7%(中国 91.9%、韓国 91.8%、米国 75.7%)を、人生の達観などと肯定的にとらえるわけにはいかない。

大学進学に限らず、スポーツでもなんでも、苦勞をしてでもより高い壁に挑戦することの醍醐味を実感させる志の教育的取組みが、わが国教育を通じての大きな課題ではないか。

(わかい・やいち=上越教育大学教授・附属小学校長併任)

本紙は、<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>でも掲載

●最新刊 好評発売中! ●

菱村幸彦【編】A5判 230頁・定価 2415円 教育開発研究所・刊

学校はどう変わるか! 義務教育構造改革の中身を徹底整理・検証する!

『最新教育改革ここが知りたい 中教審答申と義務教育改革』